大会報告

木村惜しくも５位

日本チーム監督
田中 博

世界トレイルオリエンテーリング選手権大会　2011 年 8 月 15-16 日　フランス

木村 惜しくも 5 位。あと 1 点で銅、あと 2 点で金、大魚を逃す。
日本チーム団体で 6 位入賞
昨年の 14 位から大躍進。

2011 年 8 月 15-16 日 フランス
世界トレイルオリエンテーリング選手権

速報ボードの前の木村治雄

フットリエンテーリング、トレイルオリエンテーリング世界選手権の開会式
東日本大震災に対する各国へのお礼を手に街中をパレードする。

会場

8 月 15～17 日にフットオリエンテーリングの世界選手権と同じ南フランスのサボア地方でトレイル 0 の世界選手権大会(WTOC)が開催されました。

イベントセンターはエクスレバンという町にあり、近くにはアヌシー湖という箱根の芦ノ湖を大きくしたような、きれいな湖があり、ローヌアルプスと呼ばれる地方です。

日本でいうなら、大町市と木崎湖、そして実際の大会会場は美ヶ原というところでしょうか。

宿舎

宿舎のホテルは、シャンベリーの町外れ 高速道路脇のモーテルです。

周辺には 工場団地(トヨタもありました)と、30 分ほど歩いたところに、カルフール(日本にもあったスーパー)や、ステーキハウスなどがあります。

直ぐ裏の川沿いには 整備されたサイクリング道路がシャンベリーまで続き、さすが自転車の盛んな国です。シャワーはバスタブなし、冷蔵庫もなしツインの部屋は狭く、もう少しゆったりと休めないと、疲れが取れない感じがします。お金の問題がつきまといますが、もう 1 ランク上げた宿舎にすれば良かったかも。

モデルイベント

15 日は昼間モデルイベント。会場は宿舎から約 1 時間の高原です。送迎のバスは 12 時には会場を出ると言うし、

もっとじっくり、モデルに取り組みたい、その会場で、デイスカッションもしたいと考えていましたが、木島が借りていたレンタカー1 台では 5 人しか乗れない、そこで、早くやって、早く帰る組、じっくり考えたい組と分けて取組みました。

朝 9 時ころから、結構激しい雨が降り、どうなることかと、思いましたが約 1 時間で雨が止んでくれて、事なきを得ました、やっぱりカッパは必携です。

モデルでは､先ず非常に細い直径 5cm 程度の灌木を目立つ木として拾ってあるのにびっくりです。確かに草原にありますから、目立つといえば目立ちますが、日本ではこんな 細い木は目立つ木として拾った事はありません。その細い木を 1 ミリの円で書く、目立つ木表示にしてありますから、4000 分の 1 の地図上では 4 メートルの幅を持つことになります。それが 4 本四角形に立っていたとすると、その四角形の実際の広さと、地図上の広さは、かなり違います。

その 4 本の木のどの木に正解のフラッグがあるかという問題ですから、木の立ち位置の相互関係が合っていれば、一応問題は成り立ちますが、その後にある藪との関係や、道にやけに近すぎるとか、他の特徴物との位置関係は、違ってきます。そこで Z にしたくなるわけです。しかし、どの木のどっち側という問題では、道や藪からの距離などは、見なくてよいのです。問題にしている事に注目しないといけません。このような表記がモデルに有るということは 本番でもあるということで、ここにきて、この表記は問題であるといっても、始まらないわけで、その書き方と、問題の設定に順応しなければなりません。

苔の生えた岩が、藪に隠れて、非常に見にくい、コブと岩石地の違い、などなど、これが本番にもあるなということです。

このモデルでは 木村も 13 問中 6 問の正解で終わっています。しかしながら、このモデルの体験をうまく本番に生かしたと言えます。

木村の学習能力というか修正能力の高さはハンガリー大会でも、DAY1=17位からDAY2終了の合計成績で3位と浮上したことでも証明されています。
モデルを本番にどう生かすか、これはもっと研究しなければいけないと思います。

開会式

15 日 夕刻からエクスレバンの街中で WOC、WTOC 合同の開会式がありました。目抜き通りを消防隊のブラスバンドを先頭に国別のプラカードを掲げて行進します。市中心街の円形野外音楽堂まで約 1km 、震災に対する各国からの支援に感謝する墨書の横断幕を持ち、日の丸を掲げて歩きます。沿道の人並からはひっきりなしの拍手です。街中を行進する開会式は、私には未体験であり、一般市民にアピールするよい方法だなと思いました。

開会式は 民族舞踊、アルペンホルンのフアンフアーレ、市長、IOF 会長 フランス協会会長の挨拶と続き、1 時間ほどで終了です。しかしながら日差しの強さには、参りました。日陰のない会場で、意味の分からない挨拶を聞き続けるのも、結構きついです。
愛知でやった 選手宣誓はありません。 この選手宣誓という儀式は日本独自のものでしょうか？

開会式が終わり ホテルに帰ったのが夜の8時半 この時刻になってようやく 夕暮れになってきます。それから食事をしてシャワーを浴び その間チームオフイシャルミーテイングに出ていた、田代 山口の帰りを待って、チーム全体のミーテイングが始まったのが夜 10 時 、翌日の DAY1 の出発時刻に合わせて朝 7 時には朝食をとらなければならず、短い時間のミーテイングになってしまいました。
体調を考えると、11 時過ぎにはベッドに入る。これが最優先事項になりました。

DAY1

昨日のような雨雲もなく、南フランスの青空が広がる中、いよいよ DAY 1 の戦いの火ぶたが切られました。トレイル0の会場は 走り回る人もなく静かな緊張感に包まれています。プレスタートから スタート地点まで約 1km 林道を歩かないといけません。その道路脇には、きれいな花が 咲いているのですが、選手の目には入っていたでしょうか?
車が入り、トイレもおける、そういう広場が、トレイル 0 に適したテレインから約 1km 離れていたことが このような 変則スタートになりました。日本チームは、プレスタートに田代 、スタート地区に鈴木を配置し、不測の事態に備えました。
水はプレスタート地区に、ペットボトルが置かれ自由にとることができました。

Day1 に臨むトレイルオリエンテーリング日本選手団

スタート前の一言
大久保・モデルイベントでの学習を生かして、しっかり本番に取り組みます
山口・・イメージしてきたものと違うので、出たとこ勝負です。
木村・・特になにもない、無心に取り組む
高柳・・なんとなくプレッシャーを感じています
森 ・・・強者に勝ちたい
木島・・タイムコントロールを慎重に

フイニッシュから このプレスタート地区まで、ミニバスによる輸送が行われ、随時選手が帰り始めました。高柳、森ともにかなり体力の消耗が激しく、暑さが思いのほか応えたようです。続いて、大久保、山口と帰ってきました。
帰った段階で、山口は正解なしが 9 問もあったと首をかしげています。 大久保は制限時間一杯でかなり厳しかったと言ってます。木島 木村と帰ってきましたが、正解表が配られるまで重苦しいような、期待半分のような、やがて正解表が配布、山口 大久保が冴えません。特に山口は納得がいかないらしく、調査依頼を書き始めました。

木村は 1 点のミスで済みましたが、なんと 満点が 8 人もでては、順位は大幅に下がり 12 位です。しかし 3 位に入ったハンガリーでは トップと 4 点差の 17 位だったわけですから、木村としては、まだまだ、優勝のチャンスがあるわけで、期待を明日につなげました。

山口の調査依頼は、英語で書くことが大変で、締め切り時間ぎりぎりでようやく出しました。特徴物についているのはついているが、その方角が少しずれている という趣旨の調査依頼でしたが、裁定委員が 確認したところきちんと方角があっているということで却下されました。

この日もチームオフイシャルミーテイングの終了が夜 8 時半頃で、この報告を兼ねた日本チームのミーテイングは 夜 10 時頃からとなりました。
監督の私からは、団体戦は DAY2 のみの成績で競うので、今日点が取れなくても切り替えて、明日は明日で取り組んでもらいたいと指示を出しました。
ここまで来て、あまり細かいことを言うより、気持ちの切り替えと、フランス流への順応が最も大事であると判断しました。
又 今回は 運営上の都合から、オフイシャルでテレインに入れるのは各チーム 1 人だけという制限があり、DAY 1 は鈴木 DAY2 は小泉しか実際のテレインに入れず、それも約 1 時間くらいしか時間がなかったので、チーム全体として、あのコントロールはどうだった、このような見方は良いとか、悪いとかの反省はあまりできずに、明日の迎えのバスが 6 時半には来るので、早く寝るようにといった、スケジュール面の対応に追われました。

Ｐクラスの代表３人と監督の田中

DAY2

いよいよ勝負の DAY2 です。
木村の修正能力が生かされるか、山口、大久保がどう立ち直るか？
今日の会場は フットのロング決勝と同じ会場で、広い牧場に参加各国の国旗が飾られフイニッシュ地点にはゲートが設営され 物品販売のテントも立ち並び、大きなスクリーンも用意されて、すっかり世界選手権の雰囲気です。
トレイルのスタートは バスで選手のみ輸送です。オフイシャルは フイニッシュ近くの日陰を選んで、ただ待つばかりです。
選手の輸送バスは 適当に選手が集まったら出発してゆきます。
その輸送バスに遅れないようにスタ

ート時刻を見ながら選手に準備を促すのですが、さすがに選手の方が 緊張していて、さっさと準備してバスに向かいます。
　どういう所からスタートして、スタートの雰囲気はどうかというのが全く分からず正直つまらない。明日行うリレーのテレインと同じということで、立ち入りが厳重にチェックされ、トレイル０の競技エリアの写真をとってもいけない。万一違反行為が判明したら、チーム全体を失格とするとミーテイングで言われたそうです。

　待つことしばし、その間にＴシャツやらのオリエングッズを見たり、ロングの選手がフイニッシュするのを見たりしているうちに、高柳、森 木島 山口、大久保と順に帰ってきます。山口は、昨日より良いと思うと語り、高柳森のＰクラスの選手も今日は少しは手ごたえを感じている様子、ホットしました。木島も昨日より易しいと言っています。ようやく、木村が帰ってきました。どうも１問間違えたと言って 悔しがります。速報が待たれます。

　木村の速報カードが1位に入ります、これからです。これから後の選手が何人 木村の前に来るか、フインランドのヤリが木村の後に下がりました。
　でも一人二人と木村の前に入り始めました。フインランドが強い、1 位 2 位を占めました。何とか 3 位と思いましたが、 結局 4 人が上位に来て、5 位の入賞が決まりました。
　DAY 2 では満点が二人しか出ませんでした。木村の言うには、明らかにDAY1よりDAY2のほうが易しかったのに、満点が少ないのは、DAY１の成績が悪い順からスタートする方式で、最後に優勝候補が集まり、互いに牽制したり、ライバルの動きが気になったりと、メンタル面に影響が出たのではないか？と言うことです。

　思えば、ハンガリーで初日 2 点差のトップだった田代が 4 位に下がり、フインランドでは 同じく初日トップの山口尚弘が入賞外に敗れたのです。
　トレイル０がいかにメンタルなスポーツであるか、それに打ち勝つにはどうしたら良いか、考えさせられる問題でもあります。
　山口は 何とか修正して初日より良い成績でした。大久保はついに不発に終わりました。木島がよく健闘し団体６位入賞に貢献しました。

個人戦オープンクラス表彰式
木村治雄が５位入賞

競技終了後の一言

木村・・・今日の成績は点数はまあまあ満足している。間違えたところが気に入らない多分大方の人が正解するところで間違えた。5 番の沢は デフがアッパーパートになっていないことを考えたら、沢の中心でなければいけないので Z にしなければ、・・・・うーん・・

木島・・・Ｐクラスの競技人口を増やす必要があるヨーロッパの大会経験をもっと増やしたい日本の大会は方位を問う問題が多すぎる、もっと相対的な地形を見るような問題がほしい。国内の大会を増やすとともに、もっと競技時間を短くして、国際大会で、ゆとりを持って答えれるよう訓練してはどうか。参加国が増える中、団体戦入賞は素直に嬉しい。

森・・・ 昨年と全く同じ、進歩してない 国際大会は違いますね。

山口・・TC を間違えた、手続きは一応やったつもり

高柳・・スタートからゴールまで緊張感の持続が難しい。モデルコースが時間の制約(バスに間に合わせるため 時間があまり持てなかった)があり。もっとゆっくりと検討したかった。DAY1 も DAY2 も自分としては、正解と思って答えているが、結果がついてこない。技量未熟を痛感しています。今後時間の使い方も検討します。

　山口 大久保に、WTOC で優勝するには、何が足りないのかと質問してみた。
　「経験不足。ヨーロッパの選手 特に北欧の国は隣の国が近いので、国際大会の経験が豊富であり。トレイルの大会も多いと聞いてますが、日本では年間 5 回の大会があればいい方です。もっと大会の数を増やしたい。そのためには、ある程度のレベルの大会のコースプランナーができる人を増やさないといけない。」

　以上 選手諸君の感想でした。

必ず金メダルは取れる

　アー今年も惜しかった もう一歩だった。から脱却するのに、なにが日本チームに足りないのか？
　具体的に強化策はどうするかを考え実行していかないと、同じことの繰り返しになります。世界選手権経験者を中心にして、強化チームを作り、長期に継続した強化策を実施する必要があります。毎年のように監督が代わり、その年その年で、とりあえず強化合宿を行く前に実施するだけでは、なかなか金メダルは取れません。
　トレイル０委員会とトレイル０協会合同での強化チームの発足をさせましょう。金メダル獲得作戦本部を立ち上げましょう。やれば必ず金メダルに繋がります。

　選手諸君は、良く戦ったと言えます。又チームマネジャーの田代の献身的な、寝る間を惜しんだ働きには脱帽です。
　鈴木 小泉のオフイシャルも雑用をこなしてくれて、あまり気が回らない監督を助けてくれました。留守部隊で応援していただいた皆様に感謝してこの報告を終わります。有難うございました。

（田中 博）